DREAM STORIES

働くことに困難を抱える
若者たちに
働く機会をつくるチャレンジと
若者たちの
チャレンジ

はじめに

「夢」には本来たくさんのエネルギーが詰まっています。
夢は、人類が月へ行くという途方もない目標を実現する原動力となりました。
夢は、人々が明日を心待ちにするエネルギーを分けてくれます。

しかし、今の日本は、夢を語りにくい社会になってしまったように思います。
今の自分には少し出来ないだろうことを口にすると、
「そんなことよりも、現実をみなさい」、「そんなのは単なる夢だよ」、そんな言葉がまずかえってきそうです。

確かに妄想といえるような、そこに方法や、可能性がないような夢は、
時に人を誤らせたり、暴走させたりすることがあります。これも確かに「夢」の持つ一面です。

大切なのは、夢に向かってのステップをつくること。
いつかはそこに到達できるであろう、ステップをつくっていくことです。

まずはそのステップをどうすべきか、自分でしっかりと考えること。
でも、自分の力だけでは難しいことがあります。誰かの力を必要とすることがあります。

この冊子のタイトルは、「Dream(ドリーム) Stories(ストーリーズ)」と名付けました。
ひきこもり状態が長く続いたり、働くことに不安が大きくてどうしても働くことができなかった若者達の、働くことへのチャレンジと、若者達に少しでも働く機会と環境をつくりたいとチャレンジしている人達の取り組みをまとめたものです。

社会に参加したい、働きたい。
困難を抱える若者達が、社会につながるきっかけや、働く自信を取り戻す機会をつくりたい。
そんな「夢」が詰まっています。
夢物語、ではなく、それぞれの夢を形にしていく途上の、一人ひとりのストーリーです。

ある人から見たら、「そんな些細なことは夢とは言えないよ」と思うかもしれません。
でも、人にとってはささやかに見えるものでも、小さく見えるものであっても、
やはり夢は大きさではなくて、エネルギーこそが大切だと思います。

エネルギーとは想いの強さとつながっています。
困難が大きかった分、それを越えようとする若者達の想いの強さは、その夢を確かなものにしています。

そしてこれらの「夢」が重なるとき、一つの方向性を示してくれているように思います。
それは、競争や排除を越えた、包摂性の高い新しい社会への道すじです。

とちぎユースサポーターズネットワーク
共同代表　塚本 竜也

DREAM STORIES

Dream Stories （ドリーム ストーリーズ）

目　次

目　次 …… P 3

Dream Story 1 …… P 4
カフェ フルールブラン【NPO ホワイトキャンバス】
（栃木県宇都宮市）

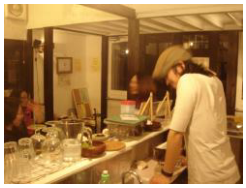
Dream Story 2 …… P 7
はるかぜ書店 【NPO 法人 アンガージュマンよこすか】
（神奈川県横須賀市）

Dream Story 3 …… P 10
カレーハウス 【NPO 法人 みらい】
（栃木県野木町）

Dream Story 4 …… P 13
薪の生産、販売 【NPO 空とぶモニョンゴロ村】
（栃木県市貝町）

Dream Story 5 …… P 16
紙袋、包装紙の製造工場 【ヘイコーパック株式会社】
（栃木県芳賀町）

Dream Story 6 …… P 20
2 tree cafe 【NPO Youth Nest Factory】
（栃木県宇都宮市）



Information、 おわりに …… P 23

Cafe フルールブラン

僕に変化を生んでくれた出会いを若者に届けたい

01

DREAM STORY

若者雇用創出

飲　食　店

「出会い、そして繋がる」

An Encounter and Being Connected

人生を豊かにするものはいったい何であろう??心身の健康、お金、ひと、趣味・・・。たとえを出せば、たくさんあるだろう。そのなかでも、ひとは、ひとに千人千色の彩りを与えることができる。人ひとりをパズルのワンピースに例えるなら、ひとひとが混じり合うことは、パズルのピースが繋がり、大きな絵を描いていくことに例えられる。出会いにより、自分の人生という名のパズルは築かれる。

Cafe フルールブラン

本拠地　栃木県宇都宮市

創立年　2008 年

創立者　山本　和彦

活動目的

不登校・ひきこもり・ニート状態にあり人間関係を築きにくくなっている就労が困難になっている若者一人一人が社会に出ることを目的としている。

就労訓練の内容

掃除、調理、接客

僕に変化を生んでくれた出会いを若者に届けたい

成長の伸びしろは無限大。山本氏を見ていていつも思う言葉だ。何が起きても受け止めて、次の行動を起こす。ピンチもチャンスに変えてしまう人とはまさにこんな人のことを言うのであろう。

そんな山本和彦氏は中学時代に3年間、不登校の経験があるのだ。しかし、今となっては不登校、ひきこもり、ニート状態にある若者を支える力強い存在だ。何が彼をそうさせたのか。自分自身に変化をもたらしたものについて山本氏はこう語る。

「それはね、様々な人との出会いだよ。出会いを重ねるうちに出会うことに喜びを見出していったんだ。気がつくと人との関りを楽しく感じることができるようになっていた。」

山本氏が体験したようなたくさんの出会いは、悩み、こころを閉ざす若者たちには少なく、社会への第一歩となる空間もあまりない。そのよう中で悩みを打ち明けることができず、人との関りを断ち、苦しみ続けている若者はどんどん増えていく。そんな若者たちのための居場所がつくりたい。若者に変化をもたらす出会いを生みたい！そんな想いから山本氏はまず、若者の居場所をつくり、後にＮＰＯホワイトキャンバス、そして若者にたくさんの出会いを生むカフェ・フルールブランを立ち上げる。

カフェ・フルールブランで羽ばたく若者

ホワイトキャンバスの事業のひとつである居場所はカフェ・フルールブランが拠点になっている。このカフェに集まる若者は将棋をしたり、ポエムや絵をかいたりしながら山本氏やカフェのお客さんと会話して笑顔溢れるひと時を過ごす。将棋は時に激戦を繰り広げ、若者たちのポエムや絵はカフェを鮮やかに彩る。

裸電球の柔らかい光の中でコーヒーを飲んでくつろごうと席に腰を下ろすと、心のこもった「いらっしゃいませ」が聞こえる。

注文したコーヒーを届けてくれた若者は「最近はどうですか？」と話しかけてくれる。時に悩みを聞いてもらう時もある。

山本氏と若者たちがつくる、この空間は、癒しだけでなく、そこにいる人々を繋ぎあわせ、心の中を豊かにしてくれる。

カフェ・フルールブランの明るい店内

就労支援を受ける若者の仕事の内容は、皿洗いなど簡易的な仕事から始まり、若者の意志と能力に合わせて徐々に増える。現在、カフェで働く若者ナオト氏（仮名）は調理やバーテンダーまでこなす。

一般的に言われることで、就労支援の中でこのようなスキルを若者に獲得してもらうことは若者の自信や向上心につながる。それはこのカフェでも言えることだが、それ以上にここの若者たちから一番感じることは、人を包み込み癒してくれる優しい力を日々培っていることだ。

先送りせず、目的をもって働く

「思いついた仕事は先送りせず、その場で処理するよう、ここで働く若者には伝えてるんだ。それから、一つ一つの事を、お金をもらうためだけにする作業としてこなすのではなく、自分に意味をもたらす仕事として臨むように伝えている。自分に意味をもたらす仕事は、ゆくゆく自分の人生を豊かにしてくれるはずだから。」

仕事というものは、先送りになればなるほど人を脅迫し、他の仕事を効率よく進めさせてくれないものだ。仕事を先送りにすることが自分のスタンス、あるいは習慣になってしまうと広範囲で作業能率が落ち、良い結果を生むことができない事は明瞭だろう。その時できることはその時に済ます。山本氏は、日々の働きから、このスタンスを身につけてもらおうと背中で語る。

「僕の場合は、毎日トイレ掃除をするよ。毎日欠かさず。そうすることで今日はしなくてもいいや、という自分の気持ちをなくして、先送りしないスタンスを継続させているんだ。」

山本氏の背中を見て、育つ若者たちはどんな実感を得て、一つ一つの仕事にどんな意味を見出しているのであろう。それは本人たちだけが知っている。客観的に見ると若者一人一人が出会うたびに大きくなっているような、そんな心持になる。

カフェとして成功させる

若者に伝えるメッセージの力強さもさることながら、カフェフルールブランのごはんはとてもおいしい。素材を研究し、一番おいしい状態で提供してくれる。

たとえば人気メニューのハンバーグ。肉の細胞を壊さぬように低火力で火を通すことで、焼成されたハンバーグにナイフを入れると肉汁が溢れだす。牛脂を追加するなどという下手な小細工はない。時間はかかるが、かかったその時間に肉のうまみを最大限に出す秘訣がある。これぞまさに、味の追求。その追求の結果、生まれたごはんは、どれを食べても舌鼓を打つことしか出来ない。

フルールブランの企業価値は、メニューのクオリティだけではない。先ほどから述べている接客のレベルの高さが群を抜いている。

「あのカフェのごはんが食べたいからだけではなく、あの店員と繋がっていたくてフルールブランに立ち寄りたい。」

と思うお客も多いだろう。実際に、フルールブランのリピーターが多いことも接客のレベルの高さを実証する一つの根拠になるだろう。そして、フルールブランの接客はこれで終わらない。もうひとつの価値は、その場にいる顧客同士を繋げてくれること。新たな出会いは、若者にだけでなく、顧客にも生み出されていく。カフェ・フルールブランは顧客でなく仲間を増やしていくカフェである。このコンセプトが功を奏し、売上は月に約５０万円で、若者一人を雇用することができている。

フルールブランで働くナオト氏

何か聞きたくなる魅力。そんな魅力を持っている人に出会ったことはあるだろうか。フルールブランで働くナオト氏は、体のたくましさとはうらはらに、主張するより、聞き取りに力を注いでくれる。そんなナオト氏は顧客の中でも、何か話したくなる人だと評判だ。

ナオト氏にここで働くようになってからの変化はあるかと聞いてみると、

「このカフェで働くようになってから、人との繋がりが増えて、コミュニケーション力も以前よりはちょっと上がったと思います。」

ナオト氏は、かつて家にこもっていたが、山本氏と出会い、カフェの手伝いを1年経て、フルールブランの店員となった。その働きぶりは、話に聞くかつての彼を思わせない。

謙虚さと笑顔が人に和みを与える癒し系のナオト氏は、今日もフルールブランでおいしいごはんをつくり、顧客を和ませていることだろう。

カフェ・フルールブランおすすめのハンバーグ

（高野悠）

はるかぜ書店

若い人たちを待ってくれる社会が来るまで

02

DREAM STORY

若者雇用創出

書　　店

「生き方を探る」

Discover a way of Living

大きな理想を描き、大事を成すことだけを素晴らしい生き方と呼ぶのではない。身近で等身大な生き方にも、良さがある。たくさんの出会い、ふれあい、繋がりの中から様々な生き方を見て学び、時間をかけて、自分にぴったり当てはまる生き方を考える。そのライフスタイルは一番持続的で、自分の本来の力を発揮することが出来るのかもしれない。

NPO 法人
アンガージュマン
よこすか

本拠地　神奈川県横須賀市上町

創立年　アンガージュマン 2004 年
　　はるかぜ書店　　2006 年

創立者　滝田　衛

活動目的

若者とゆっくり時間をかけて関ることで本来の力を引き出し、自発性や主体性を育む

就労訓練の内容

書籍販売、書籍配達販売、はるかぜ書店の運営・経営

「若い人を待ってくれる社会がまた来ると思うから」　商店街の中に、本来の若者の育て方がある

京急横須賀中央駅を出ると、勾配に並ぶ昔ながらの商店街が見える。十分程その勾配を登ると、交差点の角にアンガージュマン・よこすかはある。その向かい側にあるのが、引きこもり経験者の若者たちが経営する「はるかぜ書店」である。

理事長の滝田氏は中学校の教頭を務めた経歴を持つ。友人が仕事をやめ、学校に行きづらい子どもたちのためのフリースペースを民間でやりたいという話に賛同し、学校を去った。アンガージュマンは、不登校、ひきこもりの人たちのための居場所、学習サポート、就労支援、そして、はるかぜ書店の運営を行っている。

その書店をほとんど若者に任せている滝田氏、運営を継続する方法や彼らとの関わり方など、いかにして行っているのだろうか。滝田氏、事務局長の島田氏、コーディネーターの石川氏に話を聞いた。

本屋を経営する

「はるかぜ書店を受け取ってもらえないか」福祉団体の経営する書店を頼まれたことがきっかけだった。もともと同じ商店街の並びにはるかぜ書店はあった。「本屋を経営する、ということをきっかけに、若い人たちが仕事とか、働くということに出会ってくれたらいい」と理事長の滝田氏は思ったという。タイミングよく助成金が入り、当面は赤字を大きく背負い込むことはない、そんなざっくりとした思いから始まった。最初のはるかぜ書店のスタッフは、いわゆる社会的ひきこもりだった若者5人。年齢は、２１歳から４２歳と幅があった。彼らは、不登校、大学中退、就職活動に失敗するなどの経験から、その後ひきこもりになった。滝田氏は、その彼らに書店を任せた。

彼らは「販売士」の資格を取得し、元々あったはるかぜ書店で２ヶ月間から３ヶ月間の研修を受けた。その後、アンガージュマンの向かいに店を移動し、２００６年５月から、新しい「はるかぜ書店」をスタートさせた。理事長の滝田氏は彼らについてこう語る。

「ひきこもりの人たちは、けっこう細かい！彼らは書店の畳の上で毎日毎日夜残ってミーティングをやっていて、僕らは後ろから早く帰れよ、なんて言っていた。でも実際に本が移動してきて、書架に入れたりしていると、あぁこれは大変だ、やっぱり緻密じゃないとできない、俺にはできない、と思った。だから彼らの緻密さってのは生きるよね。すごいと思う。だけど、逆にそれが彼ら自身の大変さにもなる。」

最初の１年を過ぎたころ、壁にぶち当たる。若者同士、お互いに言いたいことがうまく言えなかったのだ。彼らから滝田氏や、他のスタッフにミーティングに入ってくれるよう要望があった。そこにたまたま中小企業診断士さんも加わることになり、以降、三者でのミーティングが行われるようになった。そして、はるかぜ書店は再びうまく回り始めた。スタッフの関わり方は主にそのミーティングに限定しており、書店の運営は若者が担っている。販売に関してはスタッフが教えてもらうこともあるという。

お客さんが育てている

はるかぜ書店の仕事には、開店当初から続けている「配達」がある。配達は一般家庭から福祉・医療施設など、遠いところは隣町まで届ける。今まで大きなトラブルはない。むしろ若者たちはこの地域において重要な役割を担っているのだ。

「ここの商店街は古くからのお客さん、つまりお年寄りが多いということなんだけど、お客さんの方がプロフェッショナルなんだよね。お客さんが商店を育てている。お客さんがじっくり待ってくれたり、「ありがとう」って言ってくれたり、店員とのコミュニケーションを楽しみにしてくれていたり、そんな感じなので、トラブルというよりは有難がられる。素人の集団なので、若いおにいちゃん、おねえちゃんって、むしろ好感を持ってもらっている、そんな感じはしますね。」と事務局長の島田氏は言う。

配達料は無料。しかしそこに見え

ない対価がある。「人との出会い」だ。そこに感動する若者は多い。配達の顧客は現在約８０件、一日平均７、８件行く。中にはお茶を出してもらい、お土産までもらってくることも少なくない。配達に使うバイクは、ボロボロだったものを隣のバイク屋のおじさんに直してもらった。本来の「つながり」がここにはある。

コーディネーターの石川氏はこう感じている。

「若者はみんなのびのびとしていて、ゆっくりとした時間の流れの中でほっとできている。そんな中で色んな思いを巡らせている。色んな大人たちを見ながら「まぁいいかな」みたいな。自分が何を思うかが大事なわけだから、それが主体性、自発的にどうするかというのを考えさせる要素でそこがいい。」

大事を成す生き方だけが素晴らしいわけではない。もっと身近で、等身大でやっていける、そんな生き方もある。商店街はありのままの姿で若者に生き方を示し、育てている。

時間をかけて付き合う

「若者に説教はしない、説教するとだいたい失敗するね」滝田氏は言う。はるかぜ書店では、教えない、挨拶練習もしない、研修プログラムは、若者たちが自ら考えている。

「あいさつとかは自然とでてきますね。しようとしてもできないわけですよね。彼らはちゃんと分かっている。だからそこにプレッシャーをかけないで放っておけば、ある時ストーンと落ちる時があるのかな、できてくるときがある。最初は緊張で手が震えていたりするんだけど。そこは短時間でできるようになりなさい、というのは難しいけれど、時間をかけてじっくりやっていけば、「店員さん」になっているんだなぁ、という感じですね。しかも、彼らは真面目だから、どんどん吸収してどんどん成長していく。」と島田氏は言う。

アンガージュマンのスタッフは、彼らは力がなくて、力をつけてあげなきゃ、という感覚を否定する。彼らは力を持っている、というのが前提にあるのだ。その力を短時間で引き出すことよりも、大切なのは、じっくり時間をかけて付き合うこと。そのうちに、若者たちは自らその力を発揮するようになる。

若い人たちを待ってくれる社会が、また来ると思うから

今の日本社会は待ってくれない。勉強や仕事、さまざまなところで競争を強いられている。時代の流れと共に、日本の働き方は変化し、それに伴い人々の関わり合い方もまた変化している。競争についていけない若者たちは、取り残され、相談できるひともなく道を失う。「ひきこもり」もそうやって生まれてきた。

「きっと社会の働き方がおかしくなっているんだと思うよね。もうゆっくりなペースで働けない状況、1時間の人間が働く労働に生産性を2倍求められて、競争の激化した中に彼らが放り込まれている。緊張感持って、ちょっとばたばたしながらスタートして、信頼できてやっと「ああ、いいよ」って言ってもらえる。そういうゆっくりゆっくり育っていく期間が全く無くて、来たら即戦力で働いて、それで働けなくなったら「やめていいよ」という状態。社会が育つのを「待つ」という時間がなくなっている。」と、滝田氏は言う。競争の中で心を病む人も増えてきた。はるかぜ書店のような「じっくり待ってくれる」職場を必要とする若者は多い。また、横須賀の商店街のように、色々な人の生き方を示してくれる環境が必要だ。人の心は「ありがとう」の言葉や、人の温もりに感動したりしながら、少しずつ取り戻されていく。最後に滝田氏は、「もうかんなくていいから、自分が生きられる分、一日５００円でも１０００円でもいいから、事業をおこしていくしかない。若い人たちを待ってくれるような社会がまた来ると思うから。来たらいいじゃない。来るまでは、こういう町場の中でやっていく。最初にはるかぜをはじめたように。」と語られた。

アンガージュマンは、次に来る新しい社会を待ちつつ、様々な働き方を生み出すことに挑戦し続ける。おじちゃん、おばちゃんの個性あふれる横須賀商店街、そこにまた新しい個性が今後加えられていきそうだ。

NPO法人みらい
カレーハウス
この世に不必要な人なんていない

03

DREAM STORY

若者雇用創出

飲食店

「存在意義」
The Meanig of Existence

人は、何故、孤独を感じ、悩み苦しむ？
人は、何故、自らの命を傷つけ、そして断つ？
それは、自分が人の心の中に生きていない。誰からも必要とされていない。誰の役にも立てない。と、自分がこの世に生を受けた意味を見出せなくなったからなのではないだろうか？本当は、誰にとっても必要な存在なのに…。自分が認知され、必要とされているとわかった時、そこに自分の存在意義が生まれる。

NPO法人みらい カレーハウス

本拠地　栃木県野木町
創立年　みらい　2002年
　　カレーハウス　2004年

創立者　清野　恵美子
年間活動費
活動目的
精神障害者だけでなく、そこに含まれないボーダーの人たちも就労につなげることを目指す。

活動内容
「コミュニティ茶論　みらい」
相談支援　居場所
「カレーハウス」
小規模共同作業所　レストラン

～ある青年との出会い～

清野氏はラベンダーハウスという小規模共同作業所で支援していたころ、ある青年を紹介された。彼は、対人恐怖症という、社会不安障害を持っていた。

「その青年と関ってみると、病気ではないのだけれど、コミュニケーションがうまくいかない、労働も長く続けることができない青年たちの存在に気付いたんです。そしてそんな青年をケアする施設がほとんどないことにも気づいたんです。」

対人恐怖などの症状をもつ青年たちは、精神障害と認定されないために、国の補助を受けられず、社会生活に困難を抱えてしまう。人と関る居場所を持ちづらいということもあり、コミュニケーション力を養うこともなかなかできない。

この現状に気付いた清野氏は、まずそのような青年たちが集う居場所をつくるためにＮＰＯ法人みらいを立ち上げ、障害の有無にかかわらず来られる居場所「コミュニティ茶論」を始めた。

あえて選んだ接客業カレーハウス

「コミュニティ茶論」を始め、関る青年たちのニーズを聞き取っていくと、やはり将来的に就労を目指す若者が多い。

しかし、青年たちは面接を突破するコミュニケーション力を持っていない。そこで、清野氏は青年たちが不得意とする接客業をあえて選び、青年たちが不特定多数の人と関ることでコミュニケーション力を養う「カレーハウス」を立ち上げた。

苦闘を乗り越え接客の喜びを手に

カレーハウスでの業務内容は店内の掃除、ウェイターやレジ、電話対応、会計、調理、買い出し、ミーティングといった一般の飲食店が行う仕事をすべて青年たちの力で行う。

「ウェイターはもちろん電話対応や買い出しは、コミュニケーション力が必要なので、はじめのうちは大変な仕事です。茶論を始める以前に出会った青年の場合は、はじめのうちは質問にうまく答えられない時もありました。それが、少しずつきるようになって、今は初めての人でも、緊張はしても、受け答えができるようになっているんです。カレーハウスでお客様アンケートを置いていますが、御褒めの言葉が書いてあると嬉しいと言っています。人に喜ばれるサービスをしたときに、自分の存在価値を認知できる実感があるんですね。当然、失敗もありますが、毎日のミーティングで自分たちの力で話し合って改善しています。」

現在１０名の青年がカレーハウスで有給（時給制）の就労訓練生として働いている。仕事内容はコミュニケーションばかりではなく、訓練生の段階に合わせて掃除から開店・閉店準備、調理など、多岐にわたる。一人ですべての仕事ができるようにではなく、メンバー全員が協力し合って店を運営している。

青年の力を引き出す

「まず褒めることが大事。自信をなくしている人には自信を持てるよう褒めます。ペースが遅くてもまじめに仕事をする若者がいたら、まずはそのまじめさを褒めるんです。そして、何より大切なことは信頼関係を作ること。信頼関係ができてはじめて、改善点を伝えていくことができます。じゃあ、信頼関係はどう築くのかというと、青年たちの話をよく聞いて、安心感を生み、その子の存在意義を見出します。」

カレーハウスの看板。緑色の看板が目印です。

果たして、自分の存在意義とは一体どこにあるのだろうか？多くの

悩み多き青年たちと関り続けてきた清野氏は、人が生きている実感、つまり存在意義は命あって体が物理的に動くことではなく、誰かに自分の存在を認知され、必要とされていると気づくことだという。

「たとえ、どんな石ころであっても不必要なものなんてなくて、その石ころがあるから世の中は回っていると思うんです。石には石にしかできない事があるんです。金は高価だけど金だけでは世の中は回らないでしょう？この世の中に不必要なものなんてない。それ一つなくても世の中は困る。同じように誰もがひとりひとり必要な存在。それを伝えたいんです。」

口調は静かであった。しかし、この言葉に宿される清野氏の青年たちへの想いが、青年たちの心の中に生命の息吹を静かにゆっくりと生み出しているのだろう。

必要としてくれる人がいるから

このような理念、活動、結果（青年たちの成長）を以てしても、飲食業としての売り上げは伸び悩んでいる。とりわけリーマンショック以降、売上の低迷が際立っているようだ。このような中で、共同作業所への助成金はごくわずか。清野氏は、それでもなお、事業の継続を目指し、自立支援法の改正に伴って、内容が変化した共同作業所としての条件をクリアし、青年たちの応援をあきらめようとはしない。

「この場所が、誰にも必要のないものなら辞めてもいいです。だけれど、この場所に来て、関ることを必要としてくれる人たちがいる限り、いえ、必要としてくれる人がいるからこそ続けています。」

具体的に共同作業所を継続するための条件とは、訓練生を２０名にすることである。レストランだけでこの条件をクリアするのは厳しいため、その他に多様な仕事を創出して規模を拡大する予定だ。

カレーハウスの店内。たくさんのカレーメニューがある

「足が速い、料理が上手など色々な能力や価値観があって当たり前なのに、全員が高学歴・大企業を目指すような価値観の偏った社会になっていると思います。ゆとり教育で個性をのばすと言いつつ、運動会では全員同時にゴールする学校など、逆に個性を消している。精神に障害を持った方と接するときの違和感を受け入れる社会を目指したい。その一方でみらいに来る人たちに、病気だということ・コミュニケーションが苦手だということを理由にして、努力することをあきらめてはいけない、と伝えています。社会に理解してほしいと訴えるばかりではなく、本人の働きたいという思いが大切だとも思うのです。」

ボリュームもあり、とてもおいしいカツカレー

（高野悠）

04

DREAM STORY

若者雇用創出

村

「適材適所」

The Right man in the right place

この世に生まれたたった一人が持つ、世界に二つとない力。その力を活かすことのできる仕事が、その力の持ち主の居場所になる。自分の居場所で発揮するその力は、次第に大きくなり、他のものに追随を許さない。

空飛ぶモニョンゴロ村 里山自然循環型 エネルギー経営研究所

本拠地　栃木県芳賀郡市貝町
創立年　1990年
創立者　佐藤　隆司

活動目的
様々な背景を持った人が、ともに支え合い、ともに働く、ヒトにも地域にもやさしい村づくり

活動内容
林業（薪販売）
若者の薪割りアルバイト
若者自立塾　講師

世界一やさしい村を目指して

「モニョンゴロ」とは、ケニアの言葉で「ムカデ」を意味する。代表の佐藤氏は、この団体名に色々な意味を込めている。

ムカデは一般的に気持ち悪い、危険というイメージがある。しかし、ムカデの子育ての話を聞いたことがあるだろうか。そのネガティブなイメージは一転する。母ムカデは飲まず食わず卵を守る。蛇がとぐろを巻いたような状態で2，3ミリの小さな卵をぺろぺろ嘗めながら細菌から守るのだ。そんな母ムカデの子育ての様子を一見した代表の佐藤氏は感動を覚えた。また、弱い人に合わせないと、どんな強い人でも転んでしまうという「ムカデ競走」にも由来している。「空とぶ」は、人間の作った国境、宗教、イデオロギーなどの境を飛び越えたいという思いが表れている。

一人一人のエネルギーを生かす場所。リアリティーのある居場所

Ⅱ　仕事

同村内には、大小様々な家が点在し、いろんな人が生活している。佐藤夫妻が運営する、知的障がい者のためのグループホーム、他県から来た自然農法を実践する若者、近所にはおじいちゃん、おばあちゃんたちも住んでいる。２００５年からは、厚生労働省の若年無業者のための就労支援事業、「若者自立塾」を受託実施団体に、モニョンゴロ村の建物を提供し、自立塾の若者たちも、同じ村に暮らしている。

若者自立塾では、就労を目標に、3か月間の合宿生活をしているが、集う若者たちは、「就労したくてもできない」人が多い。学生時代のいじめの経験から、長期間「ひきこもり」に至ってしまった若者、様々な理由から、精神疾患を患ってしまった若者、または職場での人間関係がうまく構築できないことに悩み、仕事を転々としてしまう若者など様々だ。「ムカデ」の心をもった、様々な人が生活するこの環境に、若者達の心も少しずつ解きほぐされていくようだ。

同塾の若者たちと関わって、佐藤氏はこう感じている。

「関わる前はごく一般的な庶民と同じ考えだったと思う。「ひきこもり」なんて追い出しちゃえばいいじゃんとか、親の問題で甘やかしちゃったんじゃないの、とか。単純に誰かが作った「ひきこもり」のモデル、そんなイメージだけで考えていた。向こうの立場になって考えない、人は。実際に会って話をしたら人は違う。何社も受けて、試験に落ちて、子どもの頃はいじめにあっていたり、いろんなことを経験してひきこもっているのが安全だと思えば、そういう形になっちゃうよね。自分も本当にどん底の状態になっちゃうとひきこもっちゃうと思うよ。」

また、そういう彼らと関わる人においても、ひきこもり関係者だけの問題ではないと指摘する。行政、民間、企業、様々な人が入って、みんなで何が問題なのかと考えることが大切だと訴える。

「若者たちは、ネットゲームがみんな大好きなわけではない。やっぱりリアリティーのある居場所が必要。それはズバリ仕事だと思うよ。仕事で居場所を作ってやらないとだめだよね。思ったのは、彼ら自身がおれ自身の問題というか、人ごとには思えないなと思うことはある。彼らの姿をみているとね。彼らの表現の方法が、たまたま「ひきこもり」という手段なんだよね。たまたま自己表現ができないだけ。」

佐藤氏自身も、学生時代から将来の仕事に悩み、時には海外に旅に出ながら、様々な業種の日雇い労働を経験してきた。やっと見つけたのが今のカタチだ。そんな過去の自分自身と彼らが重なる。

利用価値がないと思われていた自然の中の木材も、加工すれば立派なエネルギーになる。人も同じだと佐藤氏は言う。どんな人でも必ず自分の居場所がある。一人一人のエネルギーを生かせる場所が必ずある。

若者との関わり方と評価

たくさんの自立塾の若者たちと関わってきた佐藤氏、自立塾卒塾後にも、関わった若者が何人かいる。

同じ栃木県内に住むマサオ氏（仮名）は２４歳。マサオ氏は仕事の経

験はあったが、物事を考えすぎて身動きが取れなくなり、2年ほどひきこもった。自立塾にいた時は、言葉は多くないが、気がきき率先して動いていた。そんなマサオ氏だったが、自立塾を卒塾した後、再び動けなくなってしまったのだ。自立塾スタッフからの依頼もあり、薪のアルバイトとして声をかけ、マサオ氏は働くことを決めた。林業は、塾での作業でしか経験していなかったため、最初は木の種類を見分ける事ができず、混合してしまう日もあった。佐藤氏が後から、それらを一人で再度整理する時もあった。手間がかかることもあるが、佐藤氏はこう感じている。

「やってもらう側としては、感謝しなきゃだめだね。今日来て、できないのが当たり前。それは待っていないといけない。だから待っている間にできる仕事をやってもらう。そういう時間をイライラしないというのは当たり前。だからそういう人がいることに感謝しなきゃいけないよね。お互いに必要とすることが社会にとって重要だと思うよ。今ま

で会社とか事業も同じだけど、基準値を数字だけにしてきたけど、実際にはどれだけお互い、それは従業員、経営者、お客さんだけど、その人たちがどれだけ喜んでいるか、それが具体的に判断できる基準値が必要だと思う。大学生が会社の名前で選ぶのではなく実際に働いている人の満足度数で選べること。だからみんなで工夫して会社を作るというのが大事じゃないかな。」

しばらくすると、マサオ氏は、木の種類を覚えてきた。コミュニケーションは特別得意とは言えないが、ひたすらやる働きぶりは好評だった。慣れてきたらほとんどを一人で任される日も多かったが、仕事の終わりには、佐藤氏への報告メールを欠かさなかった。佐藤氏からは「こっちは信用しているからいいよ」、と伝えていたが、マサオ氏は一度も欠かさなかった。

「真夏の猛暑の中でも一人でもくもくと作業してくれた。いろんなアルバイト雇ってきたけれど、マサオだけだよ、続いたのは。森林組合で働いていた人でさえも、体力的に

きつくてやめてった。彼の力によれば、適材適所で合うところにあえば、すごい根性を発揮すると思う。」佐藤氏は言う。

マサオ氏が働いた期間は約1年。マサオ氏は今、県内の企業に正社員として採用され働いている。

佐藤氏は短期的な就労として他の支援機関から紹介された若者もアルバイト採用した経験がある。佐藤氏が若者を短期でも雇用する心は、モニョンゴロ村の名前に由来するのかもしれない。佐藤氏はこう語る。「基本的に俺自身は皆を憎めない。誰がだめで誰がいいっていうとかの線引きはできでない。いろんな人がいるけど、せめて俺と関わっている間は少しでも元気がでたらいいなと思う。」

昔と今とこれから

今の時代について、佐藤氏はこう語る。「今は、歪な社会。昔は人と人とが強いパイプでつながっていたんだよね。俺が子どものころは、大人、中年の親父たちは、みんな生き生きしていた。活気があって、大

人っていうのは「元気がいい」という意識だった。でも、今の大人は元気がなくて暗い顔をしている。時代が悪いってみんないうけど、俺はそうは思わない。いつの時代でも行き詰まる人はそうなってしまっていたと思う。それを苦しんで乗り越えるというのではなくて、いつのまにか乗り越えちゃったというポジティブ感で、しかも生き抜いていく力がとても大事だと思う。」

今後のことについて佐藤氏は、モニョンゴロ村を小さな一つの理想の形にしたいと思っている。日雇い労働を長年経験してきた佐藤氏自身がモデルとなって、色々な人がモニョンゴロ村のような村を作り広まることを理想としている。

世界一やさしい村づくりを目指して、今日も薪の生産に取り組む、佐藤氏

（金吉純子）

ヘイコーパック

私たちは相手をどれだけ思えている？

05

DREAM STORY

若者雇用創出

印刷工場

「待つ」
Waiting For

相手ができるようになるまで待つ。良く聞く言葉であるが、なにもせず受け身で立ち尽くしていることが、本当に相手ができるようになることを願って待っていると呼べるのか？待つことの真意には、相手に変化を望むだけでなく、相手の変化を促すために自らも試行錯誤を繰り返しながら働きかける姿勢が含まれているのではないか？

ヘイコーパック株式会社

本拠地　栃木県芳賀郡芳賀町
創立年　　年
代表取締役　鈴木　健夫

事業内容
紙袋、包装紙の製造

障害者雇用（知的、精神、身体）社員、パート 120 名中、19 人が障害者である。県内の雇用率は 1.8%であるのに対し、15%を超える。

受賞と認証
障害者雇用優良事業所
日本障害者雇用促進協会会長表彰

ヘイコーパック株式会社の強み

贈り物や日常のちょっとしたところで使われている紙袋や包装紙、それらを製造しているのが、ヘイコーパック株式会社。同社は１００％下請けの会社である。近年の不況の中、業績を保ち続けられる理由は、同社と依頼会社の間に「信頼」という一本の太い柱があるからだ。そんなヘイコーパックの強み、それは会社の理念とつながっている。

「私たちの強みとは、全員が協力して、全体の仕事を仕上げていくということ。もっとも大事にするのは、「協力」、「和」。みんなの力を合わせるということを一番大事にしている。」と鈴木社長は言う。社内の通路などにも、「思いやり」と書かれた額が飾られている。

同社の工場内は、とても紙を扱っているとは思えないほど、とにかくきれいである。鈴木社長はじめ、社員全員で掃除を徹底して行っているからだ。中でもトイレ掃除には一番力を入れており、素手で洗う。１日１時間半の時間をかけて洗うことで、社員にどんな効果があるのか。

「自分たちでやることによって、それぞれの心の壁が取れてくる。自分たちの職場、自分たちの会社、だから協力していこうという意識が生まれてきている」、鈴木社長の言葉だ。

同社は、障がい者雇用にも積極的で、県内外の、色々なところでその取り組みが紹介されている。色々な人と行う掃除、それにより同社の「強み」はさらに強化されていることが実証されている。

あと、一、二年すればできるようになるだろう

２００９年８月、１人の若者が県内の若者支援機関を通じて、ヘイコーパックで働くことになった。

現在２０歳のヨシコ氏（仮名）は、中学時代、周囲からからかわれてきた。高校、そして福祉科のある専門学校を卒業し、一度は高齢者施設での就労も経験した。しかし、彼女がいつもぶち当たってきた壁は、スピードや、文章の作成、計算というものだった。ヨシコ氏は、学習障害の疑いがある。ヨシコ氏のように、障がい者の枠にも入れず、健常者としては、同じ能力を発揮できない若者がいる。ヨシコ氏のような若者は、健常者として就職先を見つけなければならない。しかし、能力を求められれば、非常に厳しい現実がある。支援機関スタッフから、今のヨシコ氏の状況を鈴木社長にお伝えした。鈴木社長は理解を示し、ヨシコは働く機会を得た。

ヨシコ氏が「ここで働きたい」と申し出てから、約１年半が経った。ヨシコ氏の仕事は出来上がった製品をポリ袋に詰めること。振り返れば、この１年半の間に、上司にきつく言われたことがきっかけで、しばらく職場に来なかった時も何度かあった。自分の仕事がなくなると、他の仕事の手伝いにも行ったが、立ったままで動けないということもあった。正直、「あいつはだめだ」という評価もあった中、鈴木社長と、現場のリーダーは根気強く彼女と関わった。

「彼女にはとにかく色々なことをやってもらった。私たちもかなり粘り強くなった。もうちょっと面倒見てやれよ、何か（合う仕事が）あるはずだからって、彼女に向って行った」鈴木社長は言う。

そうしている間に、ヨシコ氏は自分から職場に慣れてきた。仕事の範囲も少しずつ広がってきている。昔と比較して鈴木社長はこう感じている。

ヘイコーパックの工場入口。たくさんの注文が全国から入る

「昔はそういうときに叱られたり、きつく言われると来なくなっちゃったりとかあったけど、言われていることに対して笑顔で受け止められるようになっただけ、立派じゃないかな。少し相手の言っていることを理解できるようになってきた。それをやったにしろ、やらないにしろ、なんとなく気づいてきている。あと一、二年すればできるようになるだろう。」

ヨシコ氏が働き続けていられるのは、働く場の理解と、もう一つ、支援機関とつながっていることが大きな支えである。職場に来られなくなった度に、支援機関のスタッフがヨシコ氏と話をし、自らの意志で職場に戻ることができた。鈴木社長も、組織の基盤があることを心強く感じている。

障がい者雇用の経験から思うこと

ヘイコーパックは社員の2割弱が障害者である。それぞれが適材適所で健常者と一緒に働いている。障がい者と働くことについて、鈴木社長はこう語る。

「人としては、学ばせてもらっている。ものすごく。絶対言えるのは、いろんな人たちがいた方がいいですよ。一人一人が強くなる。作業を中断してしまう人がいても、怒ることはない。みんなもくもくやっている。別に障がい者だろうと、健常者だろうと関係がなくて、人間って休んだりもするし、ちょっとプレッシャーがかかれば悩んだりもするし、仕事できなかったりもするし、そこがスタートだと思えばね。もともと仕事以外のことって、面倒くさいじゃないですか、人づきあいとか。その面倒くさいことを排除しているのが今の論理でしょ。マニュアルがあったら、マニュアルの通りにやる訓練されて、だから、それ以外のことで、できない人をかまって、かまうためにはどうしたらいいかとかね、そういう訓練はする必要はないっていうのが今の経済の様相だからね。」

障がいがあるなしは意識しない。いろんな人がいること、そして毎日何かあるのが当たり前なのだ。そんな日常を送っていくと、誰かを責めるという事がなくなったという。会社の一大事にも社員がすぐに集まり、目の前の現象に対してみんなで取り掛かる。それができる大きな理由の一つに、鈴木社長は、障がい者と一緒に働いていることを挙げている。

鈴木社長は、障がい者雇用の経験から当事者だけではなく、色々なサポートの中で1人を育てていくことの重要性を感じている。就労に困難を抱える若者の雇用に置き換えても、同じことがいえる。同社で働くヨシコ氏のように、色々な人が関わって、いろんな人のサポートがあったから今が在る。企業として、ヨシコ氏にもっと活躍してほしいと思うことは当然だろう。

整理整頓が行き届いた、工場内

しかし、ヨシコ氏自身と、そしてヨシコ氏の周りで一緒に働く人たちも、一緒に働き続けられるのは、同社の理念が働く一人ひとりにきちんと伝わっているからだと強く感じる。

会社というもの

本来はお年寄りや障がい者、様々な人が一緒に働いているのが職場だった。しかし、今は会社の業績を上げるにふさわしい人だけが会社に残る。効率重視で同質だけの集まりになっていると、鈴木社長は感じている。同質の集まる会社が増えていくとどうなるか、それは非常にアンバランスな社会を構築していくことになる。組織のなかでの強者は、弱者になった時のベースを持ち合わせていない。一度弱者になると、その生き方を見失ってしまうのだ。そもそも、組織、学校など、社会というものは「異質」の集まりだった。だからこそ、人は学び、共感できた時の喜びがある。鈴木社長は、社員の変化を強く感じ、今の職場環境に対して次のように思っている。

「彼ら（障がい者）とやると「これやっといて」がわからないでしょ。だから何回も何回も教えなきゃならない。わからないのが当たり前、というところからスタートするから。そうすると自分が教えているうちに、あぁ教え方変えようかなって、結局は心の力というのが、自分自身で備わってくる。あるいは、言ったらすぐにやってくれなきゃとか、できなきゃだめということではなくて、待つことができるようになる。これは大きいですよね。相手をみて待つ。そうすると、それがやっぱり思いやりにつながっていく。あるいは、この子できないだろうな、という子が1年もたつとどんどん出来るようになってくるという姿を見ると、一緒にやっていて良かったな、ってだれもが共有できる。社員さん一人一人にとってはいい人生を歩くためのすごく良い場だと思う。」

本来の会社の役割は何か。日本経済を支えているのは言うまでもない。しかし、その手前にあるもの、一度、一番身近な「地域」に目を落とみるといい。鈴木社長は地域における会社の役割をこう述べる。

「その会社があることで、経済的だけでなく、地域が良くなっていかないとだめだと思うんですよね。地域が良くなることのスタートは、やっぱり家族がいると思うんだけど。」

すべてを効率化してくと、地域、家族が崩壊していくと訴える鈴木社長。自分の権利を押しつける大人、親が地域にあふれ出てくると、学校では、「モンスターペアレント」と呼ばれる親が現れる。会社が効率化を推し進めることで、人間の心が、弱くなる。

思いやりの心

鈴木社長はヨシコと関わり、彼女のような若者たちが今後働く場についてこう述べる。

「余りにも効率重視になった社会に、何らかの形で戦っている会社、組織があると思う。そういうところに悩んでいる若者たちが出会えたらいいと思う。私たちは、会社に来られなくなってしまうということがあるものだと思っている。そのたびにあいつは駄目と言っていたら、これからの時代が成り立たない。特に、いまだに労働主力型の企業っていうのは成り立たない。むしろ、彼女らを戦力に変えていくという考え方をしていかないと。それは企業に求められるというより、社会に求められる要素。みんなが認め合うということ。」

効率重視の社会と戦う会社、ヘイコーパック。思いやりの心を大切にしている。経済活動、社内、家族全てにおいて、「相手」がいる。今、私たちはどれだけ、その「相手」を思えているだろうか。現代社会がそぎ落としてしまった「余計」といわれるものを今一度拾い直したい。

人は機械じゃない。持っている特技、良さ、温かみ、それらを発揮させるにはもしかしたら、ヨシコ氏のように、1年、2年かかるかもしれない。「余裕なんてない」の一言を少し待ってみてはどうだろうか。相手を思いやることで、もしかしたら会社全体が少しずつ変化してくるかもしれない。これからの社会を作るのは、一人一人の心の持ち方にかかっている。

（金吉純子）

工場では、社員のみなさんがはつらつと働いている

ちいさく　やさしく　あったかく　のんびり　ゆったり　居場所CAFE

「夢を育む」

Cherish a Dream

人の夢
それは人を動かす原動力
夢を描きにくくなったこの社会で
たくさんの夢を
育み　重ね合わせ
アカルイ未来へ向けた
一縷の光の道すじを
解き放つ

2tree cafe

夢を　カタチにする　物語　と　若者が　羽ばたく　EPISODES

「若者」×「地域」　2tree café の始まり

いつ会っても、爽快な笑顔で接してくれる倉本氏。その笑顔が2tree café の優しく、やわらかな空間を演出している。

今もなお、若者自立塾スタッフでありながら若者を支援する2tree café のマスターでもある倉本氏にカフェの起源について尋ねる。

「2tree café のはじまりはな、若者自立塾で出会った悩める青年のタケシ君との何気ない会話からだったんよ。」

高校入学当初から新たに友人関係を築くことが困難になってしまったタケシ（28歳男性仮名）。周囲とのコミュニケーションが極度に不安に感じられ学校生活で孤立、自分の居場所を失くし中退。その後もなかなか新しい環境に一歩踏み出せず、社会との接点を掴めずにいた。父親が定年を迎えるのを機に、働くことができずにいるタケシ氏に対して「このままではいけない」と強く思い、市貝町にある「若者自立塾・栃木」を勧める。そして、タケシは入塾し、新たな一歩を踏み出した。

自立塾で彼と同じように様々な悩みを抱えた同世代の仲間達とつながり、3カ月の共同生活や、農業、地域ボランティア等の活動を通して、成長していった。

その後2年余りは就労にはなかなか結びつけず苦しい期間はあったものの、県内の支援プログラムなど機会を見つけては参加し、着実に経験と新しい出会いを重ねていった。

「そんなタケシ君がな、ある会話の中で「自宅に使われていない納屋があるんですよ。」って言った時に、『空き家の有効活用』、『若者が社会へとつながるための新しい働き方』っていう二つのキーワードが結びついたんよ。前々から、自分が幸せを感じることのできるカフェを運営したいと思っていたからな、この時に、若者のチカラと地域を結びつけるカフェを創るって決めたんだ。」

雇用情勢は厳しく、企業が求める人材は「即戦力」と判断される人ばかり。履歴書を見て過去の経歴を眺め、面接での印象で可か否かを決める。働くことに困難を感じる若者にとって、その敷居は高く働きたくても社会と接点を持つチャンスは非常に希薄な現在。

「そんな社会だから、やっぱり時間をかけて若者が本来持っているチカラを引き出して、育くんで、地域社会を元気にする可能性に賭けたかったんよね。」

夢は様々な想いを乗せてカタチに

「まず、イメージを一枚の紙にぎっしりと書いた！ただただ思いつくままに夢を書いた！賛同してくれたプロジェクトメンバーの意見をもらいながら具体化して、企画書を仕上げた。資金は0。物件情報も何もないという、限りなく0の状況から夢のお店づくりは動き始めた。」

倉本氏が身近な人からこの夢の話をしていくと、若者を思い、必要性を共感してくれる心強い人々がどんどん味方となってくれた。物件探しも市内の不動産屋がほとんど顔見知りになるほどひたすら歩き回った。次第に開業資金も集まり、物件もイメージに合う場所が運よく決まった。気がつけばこの「夢」は自分だけではない、想いを共感してくれる仲間達の「夢」へと変わっていった。

夢を描いてから半年、夏の日差しが照りつける頃、店づくりがいよいよ始まった。当時関わりのあった多くの若者たちに声をかけると積極的に壁塗り、フロア張りなどの手伝いに出向いてくれた。若者たちは今の自分にできることと向き合いながら一生懸命に汗を流し、ペンキを顔や服に散らした。そこには設立のきっかけともなるタケシの姿があった。

店舗の改修も若者達が集まって行った

「働くということに経験と自信のなかったはタケシ君はな、オープンしてスタッフとして現場に入ることを決めたその時も、人とうまく関わりあえるだろうか、って不安そうだったな。」

タケシの旅立ち

そして２００９年１０月２５日、多くの協力者のもとに、たくさんの夢を乗せた2tree caféが晴れてオープン。日々多くのお客様が楽しみにしてお店に足を運んでくれた。

「そんな中、タケシ君は慣れない仕事に四苦八苦していたよ。現場での試行錯誤は続いたけど、次第に彼の持っているチカラを大きく活かすことができる明確な役割が見えてきたね。それは掃除と珈琲淹れ。この２つに関して自店で誰にも負けないプロフェッショナルになっていった。彼だからこそ活きるチカラがある。多くの時間をかけて語りあい、お客様に笑顔になってほしい！ただその一心で共に仕事に励んでいるうちに、彼の顔つきや雰囲気が変わり始めたんよ。」

2tree caféを楽しみにして来てくださったお客様のために、現場スタッフとして、その役割に懸命になって働いたタケシ。その心がお客様伝わり、「ありがとう」の言葉をいただくことができた時、少しずつではあるが、着実に以前とは違うたくましい表情になっていった。

「今タケシ君は、2tree caféを卒業して正社員としてＴＶメーカーの工場で働いてる。2tree caféになくてはならない存在やったけど、社会に旅立っていったよ。」

自分の努力が認められ、時間はかかったものなれ、次第に力をつけていった一人の若者は、確かに世の中を支える一人になった、という2tree caféの一つエピソードである。

「個性」×「つながり」を地域社会へ

2tree caféで生まれたエピソードをもう一つお話しよう。

主役はアイ（女性・仮名）とユタカ（仮名）。様々な理由から働くことが困難な状況にあったが二人ともほぼ同時期に2tree caféへ一歩踏み出した。

「彼らを、業務を学んでこなすスタッフとしてではなく、シンプルに「一人の人」として見たときに、その若者の個性、趣味、生き方は本当に様々な色を感じさせてくれたよ！」

カフェという場所は多様な機能を持っている。発揮できる能力によってはそれを活かすフィールドをつくることにも大きな可能性がある。

歌う才能にあふれたアイと絵や映像を創る才能に秀でているユタカ。その2人の「個性」を引き出し活かすことで、地域の中で営む2tree caféに新たなムーブメントが起こりうることを想像し、倉本氏は高揚感を覚えた。

そんなとき、カフェに「切り絵」を得意とする地元のアーティストの方が訪れた。

「個性×つながりが、笑顔に変わるんじゃないか？？そんなイメージが膨らんで、「ゆるあかりのうたげ」という名の店舗イベントを実施することにしたんよ。」

アコースティックライブに切り絵パフォーマンス、アート映像作品。手作りキャンドルのゆるあかりにつつまれながら珈琲を片手に人々がつながる空間。若者の個々のスペシャリティーを融合させたカフェイベント。それぞれの持ち場の準備を重ねプレッシャーを感じつつも当日多くのお客様をお迎えし、このイベントは多くの感動と笑顔に包まれながら無事成功に終わった。

2tree caféで就労訓練を受けた若者は現在１０名。2tree café、は多くの若者が地域で自分の力を活かし、多くの人に笑顔を生むことを願って、若者を支え続けていく。

店内にはいつもたくさんの笑顔がある

（高野悠）

Information

とちぎユースサポーターズネットワークについて

若者のチャレンジを応援する団体として、2008 年にスタートしました。
困難を抱える若者が社会に参加することのチャレンジの支援、
より良い社会をつくるためにチャレンジする若者の支援を事業の柱に展開しています。
具体的には

①若者の自立支援
②若者の就労支援
③若者の社会参画促進、若者のシティズンシップの向上
④社会事業を行う若者の育成事業
⑤若者サポートネットワーク構築
⑥若者支援に関する調査研究・政策提言

に取り組んでいます。

Tochigi Youth Supporters Network

代表理事　岩井俊宗
〒320-0808 栃木県宇都宮市宮園町 8-2 松島ビル 2F
TEL/FAX.028-612-3341　　E-MAIL. ysn_office@tochigi-ysn.net
web.　http://www.tochigi-ysn.net/
blog　http://blog.canpan.info/tochigi-ysn/）

取材のご協力をいただいた各団体（お店）の URL、または紹介ページ

◇ フルールブラン　http://www9.ocn.ne.jp/~fleur/
◇ はるかぜ書店　http://engagement.angelicsmile.com/harukaze/index.html
◇ カレーハウス　http://blog.canpan.info/tochigi-ysn/archive/59
◇ 空とぶモニョンゴロ村　http://blogs.yahoo.co.jp/nonkikonkigenki
◇ ヘイコーパック株式会社
http://seww101v.pref.tochigi.lg.jp/work/koyou/koyou/heiko-pakku.html
◇ 2 tree café　http://www.2tree-cafe.com/2_Tree_Cafe/home.html

おわりに

Dream Stories、いかがでしたでしょうか？　それぞれの夢が形になっている、その躍動感や熱量が少しでもお伝えできていたら幸いです。今回の冊子では 6 団体の方々しかご紹介できませんでしたが、栃木県内、そして日本全国に同じような想いを持ち、行動されている方々、若者達が多く存在します。いつか、もっとたくさんの Dream Stories を集める機会を持ちたいと思います。一人ひとりの Dream が実現することを願いつつ、この冊子も終わりとしたいと思います。

制作チーム 高野悠、金吉純子、塚本竜也

dream stories

Dream Stories

「働くことに困難を抱える若者たちに、
働く機会をつくるチャレンジと、
若者たちのチャレンジ」

発行者　とちぎユースサポーターズネットワーク
(共同代表　塚本竜也 岩井俊宗)
発行日　2010年3月30日
事務所　栃木県宇都宮市塙田2-3-6-1F
電話　028-622-8795
E-mail　office@tochigi-ysn.net

“この冊子は、独立行政法人「長寿・子育て・障害者基金」
助成事業の助成を受け、作成しました。”